があるのです。天のお父様、これまで、天国がどんなものであるかについて、何の疑問も教えもありませんでした。ですから復帰摂理は延長してきました。それで、多大な損害を被ってきました。サタンの侵入が甚大な損害を及ぼしてきたのです。人間自身が本当に損害を被ったのです。疑問の余地はありません。天のお父様、私たちは行かなければなりません。私たちはあなたのみ旨を果たさなければなりません。私たちはあなたの心情の深さを理解しなければなりません。私たちがどこへ行くかを理解しなければなりません。私たちが何のために行なっているのかを理解しなければなりません。何のために、何を動機として成しているのでしょうか。天のお父様、失敗の基盤を中心とした動機なのでしょうか。復帰摂理の戦いのためであり、天国建設の戦いのためであるという明確な目的がなければ、復帰摂理は延長されてしまうでしょう。天のお父様、今日私たちは本当に、私たちの心情と本心を表わしているのです。天のお父様、今日が完全な変化の日となり、私たち自身の完全な成長の日となりますように。天のお父様、私たちが前進する時、あなたの仕事を成す時、私たちは本当に復帰摂理を理解し、私たちがどこへ行くのか、私たちが何を成しているのかを本当に理解できるのです。霊的に肉的に、内的に外的にも、疑いなく、私たちはあなたの息子、娘であります。天のお父様、私たちはすべての中心に今、到達しました。今から、あなたの心情を中心として、真の父母様の心情を中心として、今朝この心情をあなたに表わしつつ、この祈りを真の父母様のみ名を通してあなたにお捧げ致します。アメーン。

信仰手記『証言』

統一思想、その体系化の歴程（前編）

人間を動物に規定している共産主義は過ちであることを発見し、愛の根源を探すために宗教の門をたたき始めた。

李相憲（イ サン ホン）

1914年 9月　咸鏡南道定平で出生
1940年 3月　セブランス医専卒業
1956年 5月　統一教会入教
1968年 2月　『新しい共産主義批判』発刊
1971年 8月　国際勝共連合副理事長
1972年 3月　統一思想研究院院長
1973年 6月　『統一思想要綱』発刊
1975年 4月　第二代国際勝共連合理事長
1981年 9月　第四代国際勝共連合理事長
1986年11月　第六代国際勝共連合理事長

生い立ち

私は儒教の家庭で生まれた。父は儒教の学者であり、三・一運動（一九一九年三月一日、日本からの解放を叫んで韓国全土で起こった、民族独立を図った運動）の時、日本の官憲に逮捕されて監獄生活をしたこともあった。五、六カ月くらい過ぎて監獄から出た時、私の年齢は満五歳だった。父はその時日本人によって逮捕されたがゆえに、日本人を憎んでいた。

このように、父親は私に幼い時から民族的教育、反日教育をした。それゆえに、私は幼い時から反日思想が強まった。そして、私は十歳の時に小学校に入学した。

私の一番上の兄は私より十歳上であったが、父は「日本の知識は学ぶものではない」と言いながら、兄を中国の北京大学に留学させた。私は小学校を卒業後、十六歳の時に高等普通学校（現在の中学、高等学校を合わせたもの）に入学した。一年生から二年に進級する時、光州学生事件が起こった。日本の学生が韓国の学生を刺したことが原因になり、全国の学生たちのストライキが起こったのである。その時、私もその学生グループに入ってビラをまきながらデモをした。日本の警察官たちは馬に乗って刀を差して堂々と行進したが、なかなかそのデモを鎮圧することができなかった。その運動は民族主義者と共産主義者によって扇動されていた。

しかし、私はその事情を全然知らなかった。スローガンが日本に反対することだったので、私もそのデモに参加した。民族主義者の組織は弱く、共産主義者の組織は強かったので、結局私は共産主義のクラブに入った。私は共産主義でも民主主義でも同じものであると思った。しかも共産主義に民族の生きる道があるような感じがしたからである。そして、「民族を救うのは共産主義だ」と結論付けていた。

私はいつも反日感情が燃えて、デモの時ごとに参加していたので退学させられた。それで、他の学校の補欠試験を受けて入学したが、その学校でまた左翼運動をして再び退学させられた。そうしているうちに、私は何回も逮捕されて甚だしい拷問を受けた。当時、世界で一番甚だしく拷問するのが日本の警察という評判があった。拷問を受けながら死んでいく人も相当いた。私は十六、七歳ごろ逮捕された時、二十五、六歳で死ぬだろうと思った。情熱的に闘う人は大体三十歳未満の人々であり、彼らは決して後退せず、あまりにも甚だしい拷問を受ける時は、壁に頭をぶつけたり、舌を噛んで死の道を選ぶことも時々あった。

私は、民族が独立するためには、指導者は死の道を選ぶべきであると思わざるを得なかった。そうして私は自分の体を棒でたたきながら、どれほど耐えることができるかの試験までした。そのくらい深刻であった。私は共産主義を高く評価していたので、共産主義の本を熱心に読んで、資本主義社会の欠点や問題点をよく理解した。そのようにして、私はより反日的、闘争的になっていったので、私の名前は日本の刑事の間ではブラックリストに載って監視の対象になった。

私はソウルで下宿生活をしていたが、刑事が一週間に一、二度何の予告もなしに急に訪ねてきて戸を開け、不穏文書などの書籍がないかと調査した。また、私が学校に行って家にいない時にも、私の机の引き出しを開けて全部調査した。三番目に補欠で入った学校は普成高等普通学校だった。その学校は、校長先生や他の先生は皆、民族主義者だったので、私のように他の学校を中退した学生を喜んで受け入れてくれた。そのようなありがたい学校であった。ところが、そこでもまた逮捕されて、何カ月か警察署の留置場の生活をして釈放された。結局二十三歳で卒業して、セブランス医科大学に入学した。

暗黒期

私の心境は大学に入学する前の、二十一歳ごろから変わり始めた。その時まで私の心にあったことは、民族を愛する民族愛と人類愛だった。それが私の心を強く引っ張った。〝民族のために闘いながら死のう！　人類のために闘いながら死のう！〟、このような座右の銘を持って生きたのである。ところが、〝民族愛とは何か、人類愛とは何か、愛とはいったいどこから来るものか〟という疑問が生じるようになった。

共産主義の唯物論によれば、人間は猿から進化したのであるが、その猿が進化する時、民族愛や人類愛がどのように進化過程の中で生じるかという問題が私の心を煩わせ始めたのである。〝民族愛や人類愛の当為性が論理的に明らかになれば、いかに苦しいといっても最後まで闘う勇気があるが、実は闘う必要がないにもかかわらず、私は今闘っているではないか〟と感じるのであった。私が歩んでいるこの道は、果たして正当な道であるかという疑問が私の心を煩わし始めた。民族愛、人類愛は唯物論からは出ることができなかった。動物にも愛はあるが、自分の生命を犠牲にしてまで他の動物を助けることはない。自分の生命を先に生かすという前提の下に、自分の子供を生かすのが動物の愛である。自分の生命を犠牲にして他の人のために闘う人間の愛は、動物の愛とは次元が全然違うように感じたのである。それでは、愛はいったいどこから来るものなのか。

これは唯物論では解決できなかった。ゆえに、結局唯物論、しいては共産主義に対する懐疑を抱き始めた。

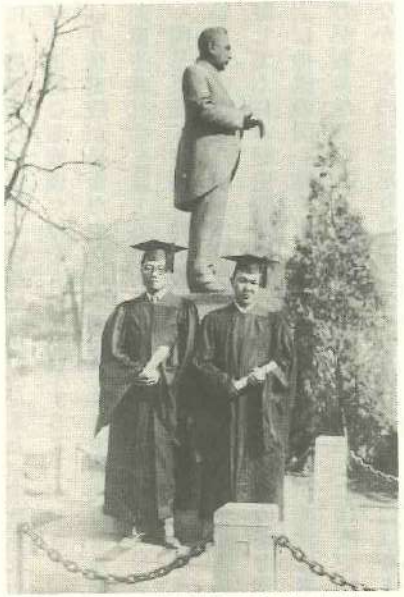
結局、共産主義を捨てるようになった。私は人間を動物に規定している共産主義は過ちであることを発見して、愛の根源を探すために宗教の門をたたき始めた。キリスト教、仏教、儒教などあるが、これらの教理から愛の問題に対する正しい答えを得ることができなかった。また、いろいろな思想や哲学があるが、それらもやはり無力だった。かえって神経が衰弱するだけだった。そうしているうちに様々な疑問がわき上がった。何を見ても疑問が生じた。例えば鳥を見れば、鳥はなぜ生きているのか、虫がはっているのを見れば、虫はなぜ生きているのかという疑問が生じた。生きているということは何を意味するのか。こじきを見れば、〝なぜこじきになり、こじきになりながらもどうして生きようとするのか。人間はどこから来て、どこへ行くのか。生物を生かしている生命というものはいったい何なのか〟。このように続いて疑問が浮かび上がった。夜空を見ながらも子供のように〝星はなぜあるのだろうか、宇宙の中で地球は非常に小さいが、小さい地球が存在する理由は何であるのか。それ以上に、最も小さい人間が存在する理由は何か〟と思うのであった。

〝動物には存在する理由があるように見えなかった。したがって動物が進化したものが人間であるとすれば、人間にも存在する理由がないのではないか〟と考えた。そしてもう一つの疑問は異性に関する疑問であった。どうして男性と女性、雄と雌がいるのか。家庭を見ても家庭には悲劇があまりに多い。夫婦になるということ、結婚するということはいったい何なのか。結局悲劇を生むための結婚ではないか。子供を生むのも結局悲劇の主人公、苦痛の主人公を生むことではないかと思った。私には兄が二人いたが、二人共十六歳で結婚した。

私も十七歳になった時、両親は私に結婚するように勧めた。その時共産主義の影響を受け、早婚に反対する立場にいたので私は結婚することを断った。二十一歳ごろ人生に悩んでいた時、父は再び結婚問題を持ち上げた。今度は結婚の不必要性に固執しながら、絶対に結婚するまいと主張した。その後、私は共産主義を捨てたが、その時は私にとって暗黒期ともいえる期間だった。地獄のような期間で、自殺を企てたことも時々あった。生きていくことが本当に苦痛であった。心臓が激しく鼓動し、頭が痛くて寝られず、

食欲がなくなり消化も悪くなった。体力も衰弱して、一日を生きるということはとても苦痛であった。ポケットの中にはいつも睡眠剤を入れておき、いつでも必要な時はそれを飲んで死んでしまおうと思っていた。生きることに意義がないとすれば、結局行く所は墓場しかないので、かえって早く行ったほうが合理的であると思ったのである。

しかしその時、〝人生には何かがある！　私が苦痛を感じる背後には何かがあるからである〟という思いが心の隅から浮かび上がったのである。それで〝死ぬことはいつでもできることであるが、死ぬことをやめてもう少し生きてみよう〟という思いが私の生命を延長させてきたのである。そうしているうちに時が流れて大学に入った。大学に入ってからは心境が少しずつ変わり始めた。私を愛してくれた親を慰めてあげようという思いで結婚した。



ゼブランス大学卒業式(右側が著者)

求道の時代

暗黒期を過ぎて求道の時期に入った。何かに頼ろうとして宗教を本格的に求めた。人生問題の解決において仏教、キリスト教、儒教などの宗教や哲学の無力さに慨嘆しているうちに、日本の新興宗教である生長の家の『生命の実像』という本を手に入れた。それを読んで意外に多くの問題が解決された。

私は喜んで生長の家に入会したが、残念なことにそこには歴史観がなかった。共産主義には歴史観があるので、いつも未来に対する希望を持つことができる。必ずや共産主義の社会が未来に来ることを歴史的に証明するので、若者たちが情熱を燃やして共産主義者になるのである。しかし私は既にそれを捨てたので、思想的基盤がなくなり、大地が崩れるような気持ちがしてとても悩んでいた。それゆえ

に、思想のない状態でいろいろ悩んだあとに宗教を求めたが、単純なる教理だけをもって満足することができず、やはり歴史観が必要だったのである。共産主義には、地上に共産主義社会を建てるという理念と希望があった。

同じように宗教も地上の問題を解決するものであろうという思いがしたが、仏教にも儒教にもそのような問題を保障してくれる歴史観がなかった。ところが生長の家は、地上に神様の国を建てると言った。私にはそれが非常に説得力があったのである。前述したように、そこには歴史観がなかったので物足りないところがあったが、私には今までで最高の宗教だと感じた。キリスト教や仏教の指導者と会って話をしてみると、本当に情けない気がした。会いに行く時は希望を持って行ったが、話をしてみると何の結論も出なかったので失望した。生長の家は地上に神様の国を建設するという希望を与えるのであった。一つ問題点があったが、それは将来日本の天皇を中心として世界を統一するということだった。私はそのことだけは決して受け入れることができなかった。

生長の家の谷口先生は、いつもキリストが霊的に再臨することを強調していた。キリストが霊的に再臨して、人間の心が悪から離れて神様のようになると教えるのである。そして、人間をみな神様の息子、娘として見て尊敬しなさいということだった。私はそのことを非常に良い教えとして受け入れて、本当に人に真心を尽くして尊敬しようと努力した。その後、日本は太平洋戦争で敗れたが、敗戦する直前に生長の家で発行していた月刊誌である『生長の家』が廃刊された。なぜならば、紙がなかったからである。

最後の号で谷口先生は悲壮な心で巻頭の辞を書いたが、それを読むと、「雑誌はこれから出版することができなくなったが、皆さんは、信仰を決して失わないようにしてください」と訴えるのであった。ところで、その巻頭の辞の中には、キリストが肉身を持って再臨するという一節があった。今までは霊的再臨であると言っていたが、その時は肉的再臨だと言うのであった。そのことは、私にとっては非常に衝撃的なことであった。一九四五年八月十五日、結局日本が敗戦して韓国は解放され、一九四八年八月十五日に国土が分断されたまま大韓民国の政府が樹立され、完全に独立した。

その時、私は忠清北道永同で個人病院を営んでいた。一九五〇年六月二十五日、北韓軍の南侵によって韓国戦争が

起こったが、韓国軍の後退によって私は家族を田舎に疎開させ、私は一人で釜山へ避難した。そして、そこに新しく設けられた警察病院の内科で働くようになった。その間に国連軍の到着と共に北進が開始され、九月十八日にソウルが奪還され、私はしばらくの間ソウルに滞在した。中共軍の介入によって国連軍が再び後退して、私も再び南へ避難せざるを得なくなった。

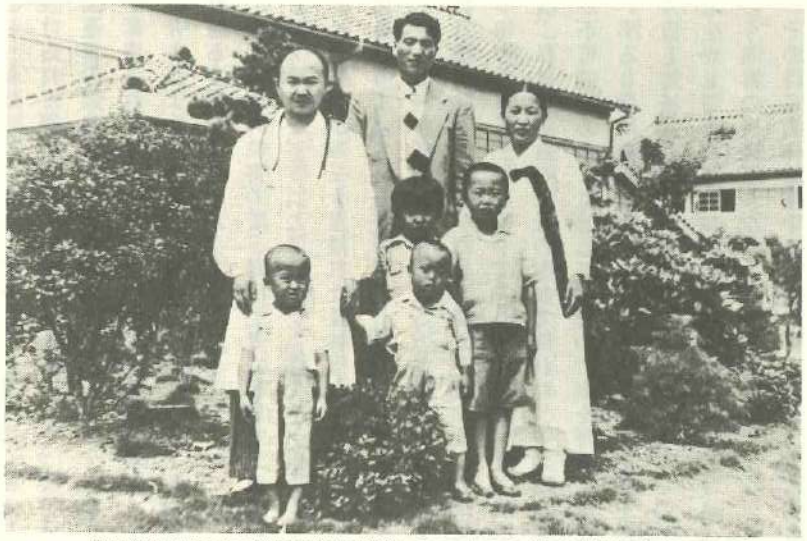
今度は永同に寄って、疎開させた家族を連れて再び釜山まで下ったが、そこでは住む所を探すことができなかった。それで釜山から三十里離れた長林里という小さな寒村に部屋を借りて、そこに家族と共に住んで、警察病院に通った。

一九五一年二月、急に腸チフスにかかって重体に陥った。数日間高熱が出て、甚だしく腸から出血をしたので、二月下旬のある日、気を失って失心状態に陥った。失心する直前、私は腸からの大量の出血で倒れた。その時、私は回復が不可能であると直感して、急いで妻を呼んで子供をお願いすると遺言を残した。そしてボーっとする気をやっと取り直して祈祷した。「神様、私を助けてください。何年でも生かしてくだされば、神様のみ意どおりに生きます」という内容の祈祷だった。

その時私の体は空中へ上がっていくようだったが、再び下がってきてまた気を失ってしまった。どのくらい時間が過ぎたか分からないが、「李先生！」と呼ぶ声を聞いて目が覚めると、警察病院の内科課長が看護婦二人と数人の科員を連れてきて、私の右の腕にポリスマという栄養剤の注射を打っていた。あとで分かったことであるが、妻が私の遺言を聞いて事態が悪化していることを悟り、十里離れた所にある役所まで慌てて走っていって、病院に電話してくれるように頼んだのである。看護婦と科員の何人かが共に来たのは、私の最後の顔を見て、悲しむ妻を慰めるために来たということであった。

その後、私の病状は医師の誠意ある治療のお陰で少しずつ好転し、三月下旬には歩けるようになった。私は妻を呼んで、「遺言までしたがこのように治ったのは、神様が私の祈祷を聞いてくださり、病気を治してくださったのです。これから私は神様の仕事をするつもりです。苦労をかけるが、家事や子供の教育などは私に頼らないで、あなたが全面的に責任を持ってやってください」と厳粛に言った。妻は私が回復したことだけでもありがたいと思って、「そうします」と答えた。

その後、私は李永春博士が営んでいる全羅北道の群山の郊外にある、農村衛生研究所の附属病院（貧しい農民たち



農村衛生研究所の附属病院に勤務していたころ(後列左側が著者)

のために建てられた病院）の内科の課長として働くようになった。それが神様の仕事であると信じたからである。一九五五年には院長になったが、次の年の一九五六年（当時四十三歳）に伝道されて、統一教会に入教するようになった。

入教の動機

私はその時まで、開業や就職して医業に従事しながら、経済は第二の問題として、人生の問題が解決できるようにと切に願ってきた。時々患者が往診を願う時は、どんなに遠い所でも喜んで訪ねていった。なぜならば、そこに私を待っている人生の仲間がいるのではないかという思いがしたからである。夜でも、昼でも、私を呼んでくれる患者がいると、喜んで彼らを訪ねていったが、訪ねていって話をしてみるといつも失望した。会う人ごとに言っていることは、たいていお金、権力、地位、財産、異性、名誉などのことばかりだったからである。〝この世界は広いにもかかわらず、人間の心はどうしてこんなに狭いのか〟と思いながら一人で慨嘆したことが度々あった。

そうしているうちに、私は伝道されて統一教会に入教した。しかし、新聞を見るとその当時の統一教会の評判はあまり良くなかった。そのように評判が悪い時に、私は逆に統一教会に入るようになったのである。私は新聞を見た時にうわさが問題ではなく、教えそれ自体が真理であるかどうかが問題であると思ったからである。

そして、私は導いてくれた人に統一教会の本部に案内されて、劉孝元協会長から原理を聞くようになった。私は一方的に聞くことは好きではなかったので、「私の話も聞いてください」と言って、劉協会長が五分くらい語ると、そのことに対して私の考えを話した。それでは講義が進まなかったので、劉協会長は「李先生、しばらく私の話を聞いてください。李先生も宗教に対して相当な見解を持っているみたいですが、何のゆえにここに来られたのですか。統一原理を聞くために来られたのではありませんか」とおっしゃった。一応「そうです」と答えると、「では、全部聞いてみてください。聞いてから、正しいか間違いかを決めればいいではありませんか」と言った。私は「では、そうしましょう」と答え、その日の夜午前三時まで原理を聞いた。

その後数日間、統一原理を最初から復帰原理まで三回も聞いた。その当時は原理講論という印刷された本がなく、一〇〇ページくらいになるノートにペンで原理を書いたものであった。それがすなわち食口たちが筆記して持っていた経典であった。だから、そのノートを持っている食口は、そのノートを宝物のように考えるのであった。私もそれを借りて熱心に読んで筆記した。原理は非常に内容が良かった。私は人生の問題点をたくさん持っていたので、一つを聞いても十を悟ることができた。そして原理を三日くらい聞いたら、大部分の重要な問題が解決された。

私は共産主義の唯物史観を知っていたので、原理に特別、歴史観というタイトルが書いてあるわけではないが、復帰原理を聞いた時、これが統一原理の歴史観であると悟ったのである。私の喜びは何物にも代えることができなく、うれしさのあまり、人が見ていない所で踊りまで踊った。

入教した当時の先生の姿と私の決心

そのようにして私は統一教会に入教した。だいたいの疑問は解決されたといっても、細かい問題は原理だけでは十分ではなかった。それで、先生に直接お会いして質問をした。先生は部屋にたくさんの人がいる時、全体に向かって語られたが、内容は私の質問に対する解答であることが時々あった。思想的な言葉だったので、一般の食口たちに

はよく分からないようであったが、私にはよく理解できた。そして私が質問すれば、その質問に関して、個人的に詳しく説明してくださることもあった。例えば、授受作用に関する質問に対して詳細な解答をくださったことがある。その時に、授受作用にもいろいろな形態があることを悟った。それを後になって体系化したものが、今日の統一思想の中にある授受法の第一型、第二型、第三型、第四型、第五型である。その他にもいろいろな教えをいただいたが、その時ごとに、私はこの方は立派で次元の高い思想を持っていらっしゃる方であると感嘆した。さらに難しく未解決の問題を明快に答えてくださるということに対して感嘆した。そのようにして個人指導も受けたりした。また、私が感激したのは、人生の難問題を完璧、明快に解決してくださったばかりでなく、民族と人類、さらには歴史上の多くの聖人や義人、予言者らに対しても限りない哀愁の情を持っておられるということだった。

例えば説教をされる時、説教の内容が民族と人類や、迫害と苦痛を受けた義人たちのことになる時、彼らに対する哀れみに耐えることができず、痛哭なさったのである。また、六〇〇〇年間人間を救うために苦労してこられた神様を頼って、痛哭される姿にも時々出会った。歴史上一番惨めで悲しい方が、神様であるということを先生を通して初めて悟ったのである。先生は山川草木などあらゆる万物にも苦痛と悲しみを感じられ、それらをつかんで悲しまれた。天上天下に満ちた惨状、悲劇は人間の堕落のためであった。それゆえに、民族、人類、万物、神様までも救うために、全生命を捧げて苦労しておられる方が先生であった。このように、私の目に写された先生の姿は、この世の人間の姿ではなかった。この方は限りない知恵を持たれ、限りない哀愁の情を持っておられる聖者であり、神様が内在されて人間を救うために現れたメシヤであられたのである。

私は心の奥深く決心をしたことがあるが、それはこの方の思想を体系化して、世界に広く伝えることであった。その理由は第一に、この方を全人類の前にメシヤとして証するためだった。私のように苦悩している立場にいる人間がこの世界にはいくらでもいるので、そのような人々を早く救ってあげなければならないという思いがしたのである。私は先生によって救われたので、先生の教えをどうしても記録に残して、私のように苦痛を受けるあらゆる人々に先生がメシヤであることを証して、苦悩を取り除いてあげたかった。そういう衝動を抑えることができなかった。

第二は統一原理を思想体系化することによって、統一教

会が誕生した目的達成に寄与するためだった。それで、統一原理を詳細に学んでみると、統一教会は次のような目的を達成するために誕生したことが分かった。第一は聖書の未解決の問題を明らかにして、キリスト教の各教派を統一するためであった。第二はあらゆる宗教を統一し、第三は宗教と科学を統一するためである。第四はあらゆる思想を統一し、第五に異なる文化を統一するためであり、第六番目は地上世界と霊界を統一するためだった。それらが統一教会が誕生した動機であり、目的であることが分かった。

統一教会がこのような目的を達成するためには、統一原理だけではなく、統一原理に表れていない多くの先生の思想まで含めて体系化し、伝えることが必要であるということを痛感した。また、先生の言葉を聞くのは私だけのためではなく、人類に伝播するためであると思った。先生が私に親切に教えてくださったのは、私を通して全人類に伝えるためであると思い、先生から教えを受けるごとにメモを取って頭に刻んでおいた。

入教後数年たってから、私は一人でだれにも知られないうちに思想の体系化を考えていたが、私自身、統一思想を今日のように先生の直接の指示によって、発表するようになるとは夢にも思わなかった。

（つづく）

金 永雲先生著

統一神学

従来のキリスト教神学では解明出来なかった奥義を体系的に明確にまとめたもの。

A5版 408頁
定価 2100円
送料 350円

李 相憲先生著

統一思想概要

統一運動の基本理念である統一思想を体系的に整理した新文化建設のためのテキスト。

A5判 408頁
定価 1600円
送料 350円

光言社 〒150 東京都渋谷区宇田川町37—17宮坂ビル1B
振替先（株）光言社 東京2—44497 ☎03(460)0429